

中村憲吉の東京

児玉喜恵子

はじめに

中村憲吉は、広島県双三郡布野村の人である。明治二十二年一月、中国山地の中央に位置する峡村で酒造と山林経営を家業とする中村家の次男として生まれた憲吉は、明治三十三年に祖母の異父妹香川八重の養子となった。香川家は双三郡の中心に位置する三次で旅館を経営していた。香川姓に入って三次で中学時代を送り、続いて鹿児島第七高等学校造士館へ入学した。

憲吉の七高時代には、その後の人生を方向付ける二つの出来事があった。

一つ目は堀内卓造との出会いである。堀内は憲吉を歌道へと導き、正岡子規、伊藤左千夫、斎藤茂吉と引き合わせ、さらにはアララギに引き入れた。憲吉にとっては平福百穂と並ぶ重要な人物である。^(註1)

二つ目は、兄純造の死去である。純造は中村家の嫡子であったが、明治四十年に急逝^(註2)。親戚・香川家の養子になっていた憲吉は、兄の代わりに家を継ぐため、再び中村姓へ戻ったのである。

この二つの出来事を経て、明治四十三年九月、東京帝国大学法科大学経済科に入学し、憲吉の東京生活が始まった。^(註3) 最初の下宿屋は本郷追分の富士見軒である。その後、大正元年十一月、深川不動尊境内の下宿へ移り、翌年四月までをここで過ごした。大正三年四月、再び本郷へ戻って菊坂の菊富士本店に住む。大正四年七月、大学を卒業し、同年十一月に結婚。そ

して、翌大正五年十月に家務に就くため帰国し、憲吉の東京生活は終わった。

約六年間に渉る東京生活の中で、憲吉は旺盛な作歌活動を行い、二つの歌集を刊行した。大正二年七月刊行の『馬鈴薯の花』と、大正五年十一月刊行の『林泉集』がそれである。^(註4)

『馬鈴薯の花』と『林泉集』の特徴は、清新な感覚で詠まれた都会情調詠である。東京の風物を詠んだこれらの歌について、憲吉自身はこう述べている。

これには多少当時の都会派詩人たちの作物の影響もあらうが、一つには田舎者がだんだんと都会趣味を覚えはじめて、半可通を振り廻したがる気持ちにも似通うものだらう。しかし又、私が本郷大学街の下宿の群居生活を厭うて、深川不動尊境内に適当な素人下宿を見付け、そこで半年ばかり暮して、物珍しい東京下町の景物に親しんだことも、これら都會情調詠の作因となつてゐる。ただ私のは諸家の如く垢抜けがして居なくて、やはりアララギ流にくすんでゐる。(註5)

そして、憲吉が「アララギ流にくすんでゐる」という都會情調詠に詠まれる東京は、なぜだか曇天や靄・霧・埃に覆われた東京が多いのである。このことについては、『林泉集』が刊行されてすぐに石原純が

其の知覚的対象の多くは、潮香、曇り、靄、霧、埃、匂ひと云ふ様な静穩な趣到です。(中略)曇りや埃を、好んで歌はれる(中略)林泉集作者の最も新しい歌境は此等の深い冥想の上に展かれて、今静かにじつと将来を見つめてゐるやうに思はれます。^(註6)

というように評しているし、また白木素風にも

東京の街は、作者にとつては概ね「憂愁の都会」であつたらしい。上京の翌年に初めて「街」を詠んだ歌が見えるが、それは「くもり風ほの蒸す街のもの重く人おもおもとうごき行くかも」、かういふ歌であつた。爾後のそれも、「くもれる街」であり、「寂しき街」であり、「木枯のくらき市路」であり、「停電の街」であつた。^(註7)

との指摘がある。こうした先行論にあるごとく憲吉の東京時代の歌を通読した時、都會詠の多くが曇天および靄・霧・埃の

歌であることに否応なく気付かざるを得ない。だが、それがどうしてなのか、何に因するものなのかについては追及されることがなかった。

論者は、憲吉の日記、年譜などとこれらの歌とを付き合わせてみた結果、それが郷里と憲吉の関係性に因するとの結論に達した。

本稿では、郷里との関わりが都会情調詠を曇らせていることについて、歌の内容と時期を憲吉の東京生活と連関させ検証し、両者の因果関係を明らかにする。まず、曇天の歌について考察し、加えて近似する霧や埃の歌についても同様にみてゆく。その上で、結婚と家督を継ぐことが憲吉の都会詠へ与えた影響を明確化してゆく。

一、曇る東京

憲吉の東京詠は、『馬鈴薯の花』（全三百三十五首）に百四十二首、『林泉集』（全五百七十二首）に二百二十九首ある。このうち、曇天や霧・霧・埃を直接に詠んだ歌は、『馬鈴薯の花』の十七首と『林泉集』の五十三首の合わせて七十首である。しかし、憲吉の歌のほとんどが連作歌であるので、これらの七十首の歌が存する連作の他作品も同じ情景を詠んでいると考えた場合には、その歌数は百六十二首となる。^(註)

ここでは、曇天を直接詠んだ歌を対象として考察してゆく。

憲吉の東京詠に曇天が初めて登場するのが明治四十三年の「雪来る前」の一連である。初出は明治四十四年二月の「アララギ」第四卷第二号であるが、『馬鈴薯の花』収録時には明治四十三年の章に入れられており、盟友堀内卓造の死を悼む「堀内を悲しむ」（堀内の死去したのは十月十七日）と「歌会の歌 1」（十一月の歌会の作）の間に位置することから、明治

四十三年十月から十一月頃の作と思われる。

・曇る日のところを傷み野の空に虚ろ吹く風を寒みつつ行く

・野も山もくもり沈みぬ遠く来れば世は温くぬくと風立たずなりぬ

・天地の冬さびしつ、会ひよるや沈黙の曇りをもの散り来も

※短歌の引用は『中村憲吉全集』（昭和十三年五月、岩波書店）より。以下同。

堀内の死の悲しみが東京の曇り空に映し出されているこれらの歌には、まだ憲吉の東京詠の特徴である感覚的な表現はみられない。しかし、憲吉が曇天に傷む心を投影するという傾向は、この一連にはじまるのである。

明治四十四年四月の「アララギ」第四巻第四号には、「天地の冬さびしつ、」の歌についての自釈がある。

静かに部屋にとち籠つて居る時に、何となく心の底がムヅくと動いて悲しい様な気が湧き出し、やがてソワソワしい気持になることが度々あるこんな事は朝とか晴れた日とか雨の降る日には稀であるが夕暮方だの曇りの日には多い。（中略）歩いて居る内に私の気持は、外界の状況——光景、動静、色彩、温度音響、など——に染められてしまふ。而して、其の気分を磁針とし其の心地を全般の調子として私の感想も、観察も、思考も、進んで発展して行く様である。この気持に——殊にこの気持の現に動きつゝある時には尚ほのこと——常に歌つて見たくて耐らなかつた。（寧ろ時によつては単なる叫びとして、もよいから表現したかつた。）

ここで憲吉は、自身が「夕暮方だの曇りの日」に心が動かされることを表明している。そうした「気分」「心地」が、憲吉ならではの感覚的表現をもつて歌となつてくるのが、「曇り風」の一連である。

・くもり風ほの蒸す街のもの重く人おもおもとうごき行くかも

・いらいらする心をまちに出であゆみ曇りに歩む我れうつつなに

・物売りの戯けのうたを聞きければ真昼の街に足もすくみぬ

・ 飴売りのおどけ悲しく曇り街に面そむけつつ走りゆきけり

・ 曇り日の都大路に今日いでてこの我が見つる生きの業はづかし

これらは、明治四十四年四月の「アララギ」第四卷第四号に発表した「くもり風」七首の中の歌である（『馬鈴薯の花』収録の小題は「曇り風」）。ここにある「おもおもとうご」く人々、「飴売りのおどけ」などは、曇天のもと感覚と情緒が鋭敏になっている憲吉の気持ちを揺り動かすもののだが、憲吉を苛つかせているのは一体何なのであろうか。それは、おそらく「生きの業」についての思いであろう。前年には茂吉が帝大を卒業し、巢鴨病院に勤務しはじめている。憲吉がこれからの「生きの業」について思うとき、それは「いらいらする心」を呼び起こすのであろう。街へ出た憲吉が眼にするさまざまの「生きの業」は、学生である今の自分にとつて厳しい未来の影である。そのことを裏付けるものとして『馬鈴薯の花』には収録されていないが、初出のみにみえる「くもり風」の歌の中に次のような三首がある。

・ 真日の下にいとけき児等を釣り集め戯け売りもて汝は生くるかも

・ いま／＼しきに堪へし心もゆるむとにしみぐ悔いぬ先の憎しみ

・ 家の父の戯けを売りて得し銭をよめる灯影に一家集ふも

「生くるため」に「戯け売り」を業とする男を目の当たりにして「面そむけつつ走」った憲吉も、ふと立ち返って考えれば、それが一家を養う銭を得るためのものなのだと思ひ直すのである。そして「いま／＼しきに堪へし心もゆるむ」し、「先の憎しみ」を悔いもする。

「生きの業」に対する憲吉の複雑で苦しい思いが「くもり風」一連にあるような「曇り」に投影された歌からみてとることができるのである。

「アララギ」の同号には、冒頭に左千夫の「冬のくもり」十四首、古泉千樫の「曇れる街より」十七首も発表されている。ここでは左千夫にも

・霜月の冬とふ此のころ只曇り今日もくもれり思ふこと多し
・冬の日の寒きくもりを物もひの深き心に淋しみて居り
・独居のものこほしきに寒きくもり低く垂れ来て我家つゝめり
のような自身の内奥観照の歌があり、千攄には

・包みくる曇りに仰ぎ吾が上はあやに明るく思ひ高しも

・おほほしく曇ゆらぎて水の上にうすら日させり向岸のへに

といったアララギ調の歌があるが、憲吉の鋭敏な感覚とは全く趣きが異なる。

「アララギ」大正元年十一月の第五卷第十一号に発表の「太陽の愁い」は、『馬鈴薯の花』収録の際に小題を「憂愁の都会」と改められている。曇りと東京とをきつちりと繋いで詠まれたこの一連には、何を思つてかは不明ながら、ただただ曇天の東京の街を逍遙する憲吉の姿がある。「アララギ」大正二年四月の第六卷第四号に発表した「御茶の水景情」も同様である。

・たづたづと雨にもならず太陽の呼吸にみやこはあはれ朝よくもりぬ

・物の音もひとゆく影もおほほしく曇りへだたる街べを行くも

・街にでて底べをゆけば曇りより知らざる顔がまた出でくも

・舗石の上に曇影ふみつたまたまに己が足の音にさめ返るかな

・何はなく寂しき街にぞろぞろと人ながれつつくもり行きけり（憂愁の都会）

・曇り日の眼したの壕にどてのいろ青く映りて光り居るかも（御茶の水景情）

この頃、憲吉は深川不動尊境内の下宿に住し、作歌活動の旺盛な時期であった。先に引いた「天地の冬さびしつゝ」の歌についての自釈の中にあつた「歩いて居る内に私の気持は、外界の状況―光景、動静、色彩、温度音響、など―に染められてしまふ」といった心持ちが、この一連の歌に表されている。東京の風物とともに道行く人々が「ひとゆく影」「知らざる顔

が「あまた」「ぞろぞろと人ながれつつ」と詠われており、それらが物思う憲吉の孤独と寂寥とを表出させているのである。

ここから『林泉集』の時代に入る。「アララギ」大正三年十二月に発表の「初冬」は、『林泉集』収録の際、他歌とともに「街上雑詠」としてまとめられた東京詠である。

- ・ 街つじに曇り朝あけ鈴さむく新聞の賣子立ちか出づらむうりこ
- ・ 霜ぐもり自轉車ひとつ米袋をさむく背負ひてとほ去りにけりこめぶくろ
- ・ 代々木野のけむる光に走りたる自轉車はやし光り消えつつよよぎ

「生きの業」を詠んだ明治四十四年の「くもり風」の延長線上にあるとも捉えられるこれらの歌は、東京で生計を立てるべく寒い早朝に勤労する人々が街の曇り日の情景とともに詠まれている。「街上雑詠」には他にも変電所、街灯、電車、金物屋などの東京の風物が詠み込まれており、憲吉の東京に対する関心の中心がそこに働く人々と労働の現場にあることがわかるのである。

「アララギ」大正五年九月に発表の「向日葵の花」は、曇り日のもとに花開かせるヒマワリを詠んだ一連で、曇天の重苦しさと盛夏の暑熱とが見事に歌として結実している。

- ・ おほほしく曇りて暑し眼のまへの大き向日葵は揺すれずめ
- ・ 曇り影すでに深けば日まはりの大輪の花は傾きにけりだいらん
- ・ あからひく大向日葵のもとに立ち息づき餘すふかき曇りをおほひまはり
- ・ おほほしき曇りのなかに向日葵のほひは深くながれざりけり
- ・ ちかづきて曇りのふかき向日葵の大きな花に顔を寄せけり
- ・ くもりたる四邊を聞けば向日葵の花心にうなる山蜂のおとあたり
- ・ くもり日の音を少なみ立ちつくす眼にわづらはし向日葵の花すく

・ちまたより埃ほこりにはひて流れたり曇りのふかきこの庭ぬちに

・夏の土ふかく曇れりふところに蝉を鳴かせて童子わらべ行きたり

これまでに挙げた曇りの歌の他に、大正三年六月作に左千夫を追悼した「日けならべて膚にねばむ曇りかぜ居ても堪へじも亡なき人思もへば」があり、また大正五年七月に亀戸普門院で行われた左千夫の三周忌法会に詠んだ一連にも

・曇り風ふみ月の風は吹けれども土にさみしく君が音おとぞせぬ

・くもり風うつつに吹きて居るゆゑにことごとく物の音おとの遙はるけさ

・曇りかぜ氣け遠く吹けどしかれども土は寂しもひと甦かへらんや

がある。この三周忌法会の歌には「この日天久しく曇りて殆ど無風。予には左翁の死は不思議にも蒸し暑き曇を聯想せしむ」との詞書があり、憲吉が曇りに左千夫の死を連関させていることがわかる。

こうした曇る東京の歌は、憲吉特有のものであるといえるであろう。同時期に活躍したアララギ歌人たちの作を見渡してみても、このように東京詠が曇っている歌人はいない。先に引いたように左千夫も千櫓も曇る東京を詠んではいるが、その数は少なく、またいわゆる都会情調詠と呼ばれる歌もほとんど見られない。たとえば茂吉などは、むしろその東京詠の多くは晴天または炎天であり、憲吉の東京詠とはまさに対照的であるといえよう。(註9)

憲吉は、これらの歌を作った東京生活に何を思っていただろうか。先述の通り、大学に入学する時にはすでに家業を継ぐことが決まっていた。しかし、憲吉は就職して東京に残りたいと考えていた。四ヶ月後に大学卒業を控えた大正四年三月十六日の日記には「興銀にゆく。(中略) 僕、失敗したり」とあり、銀行へ就職しようとしていたことがわかる。さらに、就職に失敗した憲吉は、大学に残る道を考えたようである。同年五月一日の日記には「大学院入学願書を貰ひてかへる」と書かれている。そして七月、ついに大学卒業となったが、憲吉はまだ就職を諦めてはいなかった。七月十五日の日記には「藪入りの奴婢のこと思ふ。つとめ人。つとめ人の心を思ふ。僕もなるんだ」とあるのだ。しかし、嫡子がするように職にも就

かず東京にすることを布野の家が許すはずもなく、九月には縁談話が持ち上がり、決断を迫られた。九月十七日の日記には「朝めざめて縁談のことどちらにか決心せねばと思ひ居る。(中略) 見合にかへるに決す」と書かれ、この後十一月に結婚。山伏町で新婚生活を送るものの、大正五年十月に、とうとう帰郷し家業に就くこととなったのである。

扇畑忠雄は、憲吉の都会情調詠について次のように述べている。

『馬鈴薯の花』の作品にみられる浪漫的な感覚や情緒的な表現は、当時の若い『アララギ』同人たちに共通するものがあつたが、憲吉には、ことに都会の「影」や「曇り」に自分の憂愁を歌いこめようとし、それが軽快に浮滑しない点に一種の渋みを感じさせる。^(註10)

扇畑は、おそらく『林泉集』以降の、たとえば『しがらみ』にみられる憲吉の枯淡の歌境を都会情調詠へと投射し「一種の渋み」と述べていると思われるが、憲吉の東京詠が「軽快に浮滑し」得ないのは、嫡子としての自身の境遇が常に心にあるからではないだろうか。そのように考えた場合、「生きの業」の歌や、勤労の歌が曇りとともに詠われることが納得できるのではないだろうか。

二、埃吹く東京

曇天の歌と同様に、憲吉の東京詠に多くみられるのが霧、霧、埃、塵の東京である。これらの東京詠も、曇りの歌と同じく機能しているのだろうか。

曇天と同じように霧や霧は東京の空をほうつと翳ませるものとしてあるが、曇天の歌がすべて日中であつたのに対して、これらの歌の特徴は時刻がほとんどの場合夜あるいは夕暮れ時だということである。

『林泉集』の東京詠には霧の歌はないが、『馬鈴薯の花』中の「憂愁の都会」(前出)には、夜霧の降りた東京の街が詠まれている。

・霧おもく下り沈^おみたる街並みにふとかすかなる柳ゆれたり

・街々のうごきのなかは霧くらく降りて居るらむとほくとほく行かな

一連中の曇りを詠んだ他の歌と同じく、霧の歌でも何とはなく霧の降る夜の街を逍遙する姿がここにある。「霧」の語に重ねて「おもく下り」「沈みたる」「くらく」とほくとほく」の語が使われることで、曇りの歌のごとく歌が憂色にくるまれる。

続いて霧の歌だが、『林泉集』には小題に「霧」の語が使われた一連が二つあり、どちらも霧の夜を詠んだものである。大正三年の章にある「霧の海」五首は、一首を除いて大正五年十月の「アララギ」が初出だが、おそらくは一首目の初出である「アララギ」大正三年十二月に発表の「初冬」と同時期に作られたものと思われる。

・霧ふかく暮れゆく海のしらみより我がまへに來て大き帆のかけ

・ゆふ霧の磯のしらみに帆をおろす船のおとこそ静かなりけれ

・しらじらと霧は吹き來も磯の海帆をおろしたる帆ばしらの影

・磯海^{いそうみ}の霧のふかきに人の影水にくだりて動く静けさ

・霧こめて暮れゆく海の沖の島^{あかつち}緒土の山ほのかに見ゆも

この一連は、大川端の河口辺りを詠んだものと考えられる。憲吉は霧の夜を愛していたらしく、大正三年十一月十四日の日記に「夜雨、もや深し。両国まで歩く」とみえ、また同月十六日の条には「霧ふかく、たまらなくよろし」とある。霧の中に見える帆影が、広々と静かにゆったり動くさまが詠まれたこれらの歌には、憂色の気配はない。もう一つの霧の一連は、「アララギ」大正五年八月に発表された「青霧の夜」である。『林泉集』収録の同題一連は全八首である。

・舗道^{いしみち}の家壁^{やかべ}のかげの青き霧^{よる}夜くだちながら人の居るこゑ

・青き霧ちかくながれてわが息の長息^{ながき}にふかく慣^なれがたきかも

・あをき靄ながれて夜はふかけれど鋪道の上はまだ乾きたり

・乾きたるこの鋪道に錢おとし四邊にひびく靄のふかきに

・靄ふかき路樹のとほくの灯のあかり店閉ざすらん畳を叩く音

・街なかに風ふきたれば青き靄ちかくながれて居たりけるかも

先の「靄の海」一連と同様に、これらの歌に憂色はあまり感じられないが、「わが息の長息にふかく慣れがたきかも」に、東京が仮の住まいであるとの思いを感じ取ることができまいか。

これらの霧と靄の歌が夜の東京を舞台としているのに対して、埃と塵の歌には日中のものもあれば、夜のものもある。『馬鈴薯の花』中「目痛し」の一連は、大正二年の作である。この中の「ひそかなる街よりいでて昼すぎを他人の眼痛く帰り行くかな」の歌でわかるように、歓楽の夜が明けての朝帰りを詠った一連である。ここには「すさみ行く身に思ひかへる悲しさにこの踏む道の砂ほこりかな」の一首が置かれている。東京時代の憲吉は、「大正二年から四年にかけては、私の生活の最も不規律な時であった」と自身でも振り返っており、時には甚く反省するようなこともあったろう。この「砂ほこり」は「すさみ行く身」と干渉し合う形で歌の世界を作り上げており、もちろん東京での気儘な独り暮らしゆえの遊興であるから、自戒の念は遠くとも嫡子である自分へと繋がるものでもあったろう。

「目痛し」中の砂埃の歌は、少し他の埃や塵の歌とは色合いが異なっているようである。他の歌には、憂色あるいは倦怠が表出されたものが多いのである。

大正四年九月の「潮音」に発表の「浅宵裸馬の列」は、同題で『林泉集』に収められている一連で、暑い夏の夜に街を歩く裸馬たちの姿が詠まれている。高田浪吉はこの一連を評価して

「浅宵裸馬の列」の一連はやはり丹念な技巧に拠る都会詠と見るべきであろう。歌の上に看られる特殊な情景は、連作の面白味に拠って効果が挙がってゐると思はれる。作者は苦勞を重ねてかかる題材を扱ひ且つ表現に移してゐるのであ

るが、成功に近い歌と謂ふべきであらう。古代泰西の絵画を見るやうな感じもあり、それが又浮彫の如くに現はされてをり、裸馬の匂ひや街埃の匂ひが、あたかも感じられて来るかの如き思ひがする。印象風で、それが単なる表現的なものになつてをらず、句間に窺はれる作者の生命の籠りのやうなものが強く感じられて来るのである。かういふ歌の一連は、赤彦の都会詠の中には見受けられないし、茂吉の歌にもない。(註世)

と述べている。ここにいわれる「生命の籠りのやうなもの」は、曇りの歌、埃の歌全般に共通であるといつてよい。

・ 灯ほなほりかよりほるよ宵よ浅あしつ十じ字じ街まにくれば汗あせながれけり

・ 列つらりて行いくまみな裸はだ馬かまなりほこり立ちたる灯のなか行くも

・ いななかず裸馬らのひと群とほりしが埃にほふも街のあかりに

・ 馬のむれの馬の一匹立ちとまり街のあかりに埃搔きけり

これらの歌には、物憂げな倦怠の気分が宵の暑気とともに流れている。街辻の埃ぼさは、鬱々としたそのムードを強めているのである。街灯の下に浮かび上がる埃の中の裸馬たちには、詠む者の倦怠がそのまま投影されている。また、大正五年五月の「アララギ」に発表の「春の鴉」の一連にも、鴉と埃とが詠まれている。

・ 街なかの埃しぬぎて來たるらん光りつかれて居る鴉はも

・ 塀のうへに光りつかれて居るからす羽根の埃の寂くし見ゆ

・ 春真ひる物かげにして啼くからす數多はなかずまうら悲しも

街の埃を纏った裸馬たちと同じように、黒々とした鴉の羽には「街なかの埃」があり、それらは「光りつかれて」「寂しく」「うら悲しく」く憲吉の眼に映って見えている。「街の埃」は、憲吉の東京詠にとって重要な要素の一つであり、「春の鴉」と同号の「アララギ」に発表の「初夏」の一連にもそれが詠まれる。

・ たまさかに街に出づれば埃つくわれの布子の寂しく思ほゆ

・春埃はるぼこりいく日吹ききたる道ならむ今朝見れば地肌露れぢはだあらはにけり

・春埃すでに吹かざり街行けば樹のかげおほくなりおほくなりにけるかも

この一連は、『林泉集』では「暮春より初夏へ」にあるもので、歌集のこの一連は連中の「やや痩せてわかき吾わづまが丹にの櫻たずきネルたずきによるしき夏さりにけり」に見られるように、前年十一月に結婚し牛込区山寺町で新婚生活を送っている時の詠である。初夏の乾いた土埃は、季節の移ろいを表しているとともに、先の裸馬や鴉が纏っていた埃をここでは憲吉自身に纏わせている。この他、前出の「向日葵」と「青靄の夜」にも

・ちまたより埃ほこりにほひて流れたり曇りのふかきこの庭ぬちに

・小夜ふかく路樹ろじゆに觸さわればうらがなし萎しなへし葉には塵たまりたり

があり、大学を卒業し所帯をかまえたこれら大正五年の歌にある倦怠は、帰郷を迫られた憲吉の焦燥に繋がるものではないか。

三、家継ぐべくは悲しかりけれ

『林泉集』の巻頭は、集中の白眉としてもっとも高く評価されている「磯の光」三十四首である。初出は大正五年七月の「アラギ」と同年八月の「潮音」で、大正四年十一月に結婚した憲吉が、翌年一月に母と新妻とともに軻の浦を訪れた際の詠である。赤彦は「磯の光」について

君の特徴の或る頂点に達したのは大正五年『磯の光』前後にあると思はれる。明治四十一年頃から胚胎(註13)したものを、『磯の光』前後に産み落としたといふ感がするのである。『磯の光』は実に敬虔なる若き命の凝結体である。

と述べている。妻帯の喜びと責任の強まりに対する思いとが中心として詠まれているこの一連には、涙を流す歌が八首みえる。

- ・身はずでに私ならずとおもひつつ涙おちたりまさに愛しく
- ・短か世のつまと思へばうら愛しひとりの時の涙しらすな
- ・磯檜の樹皮こぼるる日のさかりおのづから悲しひとり思へば
- ・磯潮は岩にひかりて堰かるれどせき敢へぬかも一人なみだは
- ・來しかたの悔しさ思へば晝磯になみだ流れて居たりけるかも
- ・こし方の悔しさおほし低頭してなみだ流すも慰めと思へ
- ・おほけなく涙おちたり生ありてあり磯の珠も母と拾へば
- ・たまさかに歎ぶわれと思へかも晝磯のうへに涙とどめざらむ

このようにして憲吉に涙を流させるものは、一体何であろうか。もちろん嬉しさの涙でもあろうが、憲吉の「ひとりの時の涙」はやはり「來しかたの悔しさ」に起因するものであると考えるべきだろう。では「悔しさ」とは何についてのものなのか。先述の通り、結婚直前の就職活動や大学院進学の計画などを考え合わせるならば、その答えは自然と導かれるのである。それは、家業を継ぐことが目前に迫っていることに対する「悔しさ」なのである。そこには、「すさみ行く身に思ひかへる悲しさ」にこの踏む道の砂ほこりかな（前出）の歌に詠まれたような自身の放埒な学生時代に対する自省の念も含まれようが、それだけでこのように「せき敢へぬ」ほどの涙が流れるとは考えにくい。

扇畑は「磯の光」について

今までの放恣な学生々活に訣別して実社会に一步をあゆみ出した作者は、ことに結婚という事実を前に、過去をおもい現在をおもって無量の感慨をおぼえたことであろう。まさに磯の光の中に、若い日の哀歎をうたって尽きるところがない

い。近代相聞歌のすぐれた一つといふべきであろう。(註14)

と述べている。「過去をおもい現在をおも」うのみならず、憲吉はむしろ未来を憂えていたと思われる。大正二年九月の「アララギ」に発表の「ゆふべ」には次の歌がある。

・若き身の青山里あみやまのさとに歸り來て家繼つぐべくは悲しかりけれ

孟蘭盆会で一時帰郷していた際に詠んだ歌である。大正二年当時より家業を継ぐことを憂えていたことがわかるのだが、この一連にはまだ他にも同様の歌がある。

・若わかやげる我が夏影なつかげも年としごとに衰へ行けば今日もかなしも

・このゆふべ孟蘭盆燈籠ぼんとうろうのいくつかを張りかへて何か儂はかなかりけり

・山峡やまがひのこのふるさと里をまだ出でずはや秋らしき雨を今日見れ

まだ若い身ながら、年経ることを「かなし」と感ずるのは、家を継ぐ日が近くなることへの怖れである。孟蘭盆会の燈籠を張り替える作業は、未来の自身を否応なく感じさせるものであったろう。だからこそ、一時的な帰郷であつても早く東京へ行きたいという思いが「このふる里をまだ出でず」の「まだ」の語を詠ませたのである。こうした憲吉の思いは、東京で生活している間中、常に付きまとうものであつたに違いない。

『林泉集』刊行を境として帰郷し家業に就いた憲吉は、大正十三年七月に岩波書店より第三歌集『しがらみ』を刊行した。

大正六年より大正十年の間の五百五十九首を収めるこの歌集の中にある「帰住」十九首は、大正八年の章に置かれているが、帰郷当時大正五年の未定稿に手を加えて発表したものである。一連のはじめには「大正五年秋東京より帰る」との詞書があり、帰郷当時の憲吉の心境が詠まれている。

・山かひに帰れる我をおもひたり冬川のみづともしらに見ゆ

・落葉はやく庭をさみしめり昨日まで住みし都の青き樹を思ふ

- ・ 日暮るれば都よりとほき心すも裏山のかぜ雨戸をゆすり
- ・ 家族おほき家に起きふしこの頃の我がかかはりの重きをおぼゆうから
- ・ 山家住みゆふさり来れば今にして諦めがたき寂しさ湧くもやまがす
- ・ 今日も出て眼に見るものはみな山なりひと日ひと日と冬のさみしさめ
- ・ 朝の間はこころに忘れかぎろひの夕べとなれば悔いつつぞ居るま
- ・ けながき冬来むかへば山かひの家にも人にも堪へがたく倦めり
- ・ 明け暮れを人に倦みつつ冬のかぜ寒き峽間に我れ生きんとすはさま

帰郷した憲吉の「悔いつつぞ居る」という思いこそ、「磯の光」にあった「悔しさ」と同根の思いである。『しがらみ』編輯雑記に、憲吉は次のように書いている。

予が家庭上の都合で「林泉集」時代のかうした生活を切り上げて、郷里に帰住したのは大正五年の十月中旬であつた。予の郷里と云ふのは中国山脈の小峽間に介在した寂しい一宿駅である。此処では新しい文化教育を受けたほどのものは、大抵が広い世間で働くために他郷へ巣立つて行くのであるが、独り予のみは逆に都会から帰つて、その古い家族のなかで、父祖以来の家業に就いたのである。

この文章中で特に注意したいのは「独り予のみは」という言葉である。アララギ歌人の中には、赤彦や節のように地方在住のまま活躍する者もあつたのだが、憲吉はこのように「独り予のみ」と感じていたのである。ここに憲吉の東京に対する執着をうかがうことができよう。

鈴江幸太郎はこの『しがらみ』編輯雑記について

元来憲吉の人生に対する願望は大きかつた。中学時代は政治家志望であり、後には経済を家の意見で学びながら文学哲学に没頭した。これは正岡子規とも似てゐる。そこで現実に向ふ眼がよく社会人生に大きく連つてゐる。その憲吉がす

土に閉ぢ籠められたのだからその厭迫は甚だ強く作用し、深く鋭く現実を見盡し考へ盡すと共に右のやうな諦観に達した。^(註15)

と述べている。ここにいわれる「諦観」が『しがらみ』にある枯淡の歌境へとなつてゆくのだが、憲吉が「諦観」に達するまではしばらくかかった。憲吉は「大正五年の秋に東京を引きあげて帰国してより、大正六年の八月までは、私には殆んど発表するほどの歌が出来なかつた」と振り返つて^(註16)いる。

帰郷して自身の境遇を受け入れるまでに要した時間は、帰郷を否んでいた気持ちの強さを表すものであろう。妻帯しての涙の源も、東京詠を曇らせたのも、「家継ぐべくは悲し」の思いであつたのだ。

やうくに

憲吉の東京詠に多く詠まれてゐる曇天や埃は、『しがらみ』以降すっかり影を潜める。多少は詠まれてはいるが、東京詠にあつたやうな感覺的表現も清新さもなく、そこには山峡の村で諦観に達した憲吉の枯淡の歌境がある。^(註17)

扇畑は、憲吉の東京詠について

それは作者の最高作品とはなり得ないにしても、彼の歌風發育上たえず顧慮さるべき作品ではないかと思はる。そしてこれらの都会情調のゆたかなものは、一見峡村出身の作者としての似つかはしからぬものに感ぜられるかも知れないが、その清純一徹な性格は都会に於て、おのづから都市景物へ鋭敏な触手を働かせたものであらう。観照の根本態度は田園に於けるとも毫も異なる所はなかつたのである。従つて都会、田園の対象の差こそあれ、いづれにも漂ふ清純の気には相通ずるものが看られるのである。^(註18)

と述べている。憲吉の東京詠は、「峽村出身の作者」であるがゆえに、特異な生命観の籠もったものとなった。それらは、曇っており、埃を纏っている。憲吉の東京詠は、彼の七高時代にすでに織り込まれていたのだ。堀内卓造と出会い歌人となり、兄純造の死去によって家督を継ぐ身となった。このどちらかが欠けても、憲吉の東京詠が残されることはなかった。

はじめに引いた石原純の言説の中に「林泉集作者の最も新しい歌境は此等の深い瞑想の上に展かれて、今静かにじつと将来を見つめてゐるやうに思はれます」とあるのは、こうしたことをいうものではないにしても実に暗示的であつた。

先述の通り、憲吉自身が曇天に心が動くことをいつているが、それが自身の境遇と連動した心の動きであるとは考えていなかったかも知れない。しかし、曇天と「生きの業」に対する苛つきなどをみた時、その有機的結び付きは疑いを入れるところがないだろう。

憲吉は自らの定めに抗おうとし、東京に留まるすべを模索したが、それは叶わなかつた。憲吉の東京詠は、はじめから終わりまでそこを去る運命にある異郷者としての歌であつたのだ。

註

- 1 七高卒業後、脊髄カリエスのため明治四十三年十月十七日没。享年二十三歳。
- 2 兄純造は、京都法政専門学校在学中の明治四十年九月に病死。クリスチャンであつた。
- 3 大学入学以前にも、明治三十九年四月に七高受験勉強のため上京し、神田の正則英語学校へ一時的に通つてゐる。
- 4 『馬鈴薯の花』東雲堂書店。三百三十五首。久保田柿人（島本赤彦）との合著。『林泉集』光風館書店。五百七十二首。
- 5 『中村憲吉集』卷末記。昭和五年十一月、改造社。
- 6 『アララギ』大正六年二年。石原純「林泉集の著者へ」中・下
- 7 『アララギ』昭和二十一年十月。「中村憲吉歌集合評」（七）
- 8 「悼左千夫翁」「含み言」「藤なみの花」は同じ情景を詠んでいないと思われるので、計算に入れない。
- 9 『赤光』

・天のなか光りは出でて今はいま雪さんらんとかがやきにけり
・ながらふる日光のなかいろいろに我のいのちのめぐるなりけり
『あらたま』

- ・ ぶり濯ぐあまつひかりに目の見えぬ黒き蟬を追ひつめにけり
- ・ ほからほがらとひかりあかるき朝のおどこ小床にまなご眼をあきて居りにけり
- ・ 朝早く溜まる光にかがやきてえも言はれなき塵をどり居り
- 10 扇畑忠雄『憲吉と文明』（扇畑忠雄著作集四、平成八年四月、おうふう）
- 11 『中村憲吉集』卷末記。昭和五年十一月、改造社。
- 12 『歌人中村憲吉』（昭和十三年十一月、三省堂）
- 13 『中村憲吉選集』序（大正十年九月、アルス）
- 14 扇畑忠雄『憲吉と文明』（扇畑忠雄著作集四、平成八年四月、おうふう）
- 15 「アララギ」昭和二十八年十月。「林泉集」から「しがらみ」へ（三）
- 16 『中村憲吉集』卷末記。昭和五年十一月、改造社。
- 17 浅春・大正七年
 - ・ 夕だにの北山に立つ曇り雲いまだも寒し雪をはらみつ
 - ・ 昼は陽の照れる峽間となりぬれど夕空は曇り雪ふりかはる
 - ・ めづらしく吹くかぜ暖き夕べかも北山のくもり雨をもちけり
 - ・ 向か山の夕かげの雪に霧だちて降りある雨の春めきて見ゆ
- 18 『中村憲吉』（昭和二十一年十二月、青磁社）